

序

～骨髄腫治療を理解するための Myeloma Biology～

骨髄腫細胞内で起こるゲノム不安定性や遺伝子プロモーターのメチル化などのエピジェネティックな制御の異常により、特定の遺伝子が活性化あるいは不活性化し、骨髄腫細胞は症例ごとに形態・機能的にも細胞遺伝学的にも不均一な性格を呈している。このような骨髄腫細胞自身の異常に加え、骨髄腫細胞と骨髄内や骨外の微小環境との間の複雑な細胞間相互作用が、本症に特徴的な病態の形成や腫瘍進展様式、さらに治療反応性の違いに影響を及ぼしている。このように、骨髄腫は腫瘍細胞側の因子、患者側の因子において多様な状態を呈するが、現在、プロテアソーム阻害薬と免疫調節薬 (IMiDs) を治療薬のバックボーンとした治療法が臨床応用され、骨髄腫の治療成績が向上し生存期間も延長し続けている。さらに、近年の骨髄腫の分子病態の解明と治療の進歩を背景に新規薬が次々と臨床応用され、新たな作用機序の新薬の候補が多数開発されつつある。とりわけ、これまでの治療の弱点であった腫瘍免疫の賦活につながる免疫療法に期待が大きく膨らみ、骨髄腫の治療パラダイムが今後さらに大きく変わろうとしている。

さらに近年のゲノム解析などの進歩により、骨髄腫の新たな分子病態が解明されつつあり、将来の個別化治療につながるような発見も相次いでいる。また、検査手技等で現在まだ一般化できていないが、将来臨床応用される可能性のあるバイオマーカーの候補も多方面から検討されている。我々はこのような骨髄腫に対する最近の基礎的・臨床的研究の進歩を踏まえ、最新の治療薬や近い将来登場する新しいクラスの治療薬の作用機序や特徴を理解し、不均一な病態を呈する骨髄腫患者に対し、患者ごとにどのような治療法を選択し如何にうまく治療効果を引き出すことができるかが、今後問われるようになっていく。

このように、“Myeloma Biology” はより複雑に、そして難解になってきているが、本書は皆様方が骨髄腫の治療や基礎研究を遂行するために必要な“Myeloma Biology” に関する多面的な情報を網羅し、分かりやすく解説している。皆様方の骨髄腫の診療や研究に、本書をお役立て頂ければ幸いです。

平成 29 年 4 月

安倍 正博